愛知教育大学附属高等学校研究紀要第 51 号
pp.95～98（March, 2024）

４９回生の総合的な探究の時間における「附高ゼミ」の記録

―生徒アンケートから見えた成果や課題―

第３学年　探究推進部　青山昌平

「人生を切り拓く探究力」の育成を教育活動中心に据えた本校では、総合的な探究の時間において２年生から個人探究学習として「附高ゼミ」を実施した。高大連携の一端を担った新たな挑戦であった「附高ゼミ」の２年間の実践記録を整理し、生徒の振り返りアンケートの結果などから、現状の成果や改善点、今後の展望をまとめた。

＜キーワード＞総合的な探究の時間　探究力　附高ゼミ

1. 49 回生の総合的な探究の時間と附高ゼミについて

表１　３年間の総合的な探究の時間の学習計画

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
１年	探　究　基　礎　講　座								SDG s 総選挙～学校編～			
２年	SDG s 総選挙～地域編～							附　高　ゼ　ミ　Ⅰ				
３年	附　高　ゼ　ミ　Ⅱ							探究まとめ				

１年生では、探究活動に必要な知識や技能の習得を目指した学習を行った。また、社会課題への興味・関心を高めることを目的に、SDGs に関連して、学校や刈谷市についての探究活動を行った。これらの学習を通して探究活動のサイクルを経験し、３年間の総合的な探究の時間で最も重要な活動である附高ゼミに取り組んだ。この附高ゼミは、生徒が個人の興味・関心にもとづいて探究テーマと問いを設定して探究活動に取り組む個人探究活動を基本としている。

2. 附高ゼミの概要

(1) 附属高校の強みを生かした附高ゼミ

表２　附高ゼミにおける８つのゼミ

教育科学１ （学校教育、生活、特支、幼、養）	人文社会１ （国語、日本語、外国語）	自然科学１ （数学、情報）	創造科学１ （音楽、美術、技術）
教育科学２ （心理、福祉、教育ガバナンス）	人文社会２ （社会科全般）	自然科学２ （理科）	創造科学２ （保体、家政）

1）少人数によるゼミ活動

１学年 120 人を８つのゼミに分けて探究活動をすることで、教員一人あたりの関わる生徒が減り、手厚い支援の実現を目指した。

2）愛知教育大学との連携

大学教員には、アドバイザーとして参加してもらうことで、専門的なアドバイスや探究活動の展開に関する支援をしてもらった。また、教職大学院生や大学生にはサポーターとして参加してもらい、探究活動のサポートをしてもらった。こうして、高校教員だけでは足りない、探究活動を指導したり支援したりする人員を増やし、生徒の探究活動を指導することができた。

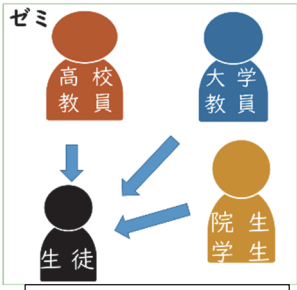

図１　運営イメージ図

(2) 附高ゼミの目標（身に付けさせたい資質・能力）

本校は、「人生を切り拓く探究力」の育成を中心の教育目標として、この探究力に必要となる「新たな価値を創造する力」、「他を受け入れ協働する力」、「主体的に学び続ける力」の３つの力の育成を目指している。４９回生には、具体的に「課題発見能力」、「協調性」、「表現力」の３つの力の向上を目標として１年生から継続して示している。

(3)「附高ゼミ」の方針

探究活動の成果重視ではなく、探究活動の過程における生徒の成長を優先したプロセス重視とすること、関わる教員や学生は探究の助言や支援を中心に行い、知識の伝達などは可能な範囲で行うことを担当教員の基本方針とする共通理解を図った。

(4) 附高ゼミの活動内容

1）探究内容

個人的な興味・関心に基づき、学問探究型もしくは課題提案型の探究活動を行った。学問探究型では、自分自身が興味・関心のある学問や疑問についてとことん探究し、課題提案型では地域や社会の諸課題について自分なりの解決案の提案を目指して探究した。

2）附高ゼミのゴール

２年生３月には、体育館で下級生も参加したポスター発表を行った。また、３年生には９月の文化祭で探究成果をポスターやスライドによって全校生徒や教職員、大学教員などに向けて発表した。そしてこの探究内容をレポートにし、成果をまとめた。

3. 生徒のアンケート結果

表３　附高ゼミの事後アンケート結果

①附高ゼミで多様な人と関わりながら探究活動を進めたことについて、今のあなたの気持ちに一番近いものを選んだください。				
とても満足	少し満足	わからない	少し不満	とても不満
33.6%	45.7%	3.4%	13.8%	3.4%
②大学生や大学院生がアドバイザーとなって附高ゼミに参加したことについて、今のあなたの気持ちに一番近いものを選んでください。				
とても満足	少し満足	わからない	少し不満	とても不満
41.4%	38.8%	13.8%	6.0%	0%
③大学教員がアドバイザーとなって附高ゼミに参加したことについて、今のあなたの気持ちに一番近いものを選んだください。				
とても満足	少し満足	わからない	少し不満	とても不満
44.2%	33.6%	19.5%	1.8%	0.9%

(1) アンケート結果の分析

すべての項目で、「とても満足」と「少し満足」の割合が高くなっている。特に、項目②の大学生や大学院生との関わり、項目③の大学教員との関わりでは、「とても満足」が一番多い。附高ゼミにおける大学との連携は、生徒にとって満足度が高かったと言える。一方で、項目①では、「少し不満」や「とても不満」と回答した生徒もおり、すべての生徒が多様な人と関わりながら探究活動を進められなかった現状が明らかになった。

(2) 自由記述の分析

①附高ゼミで多様な人と関わりながら探究活動を進めたことについて、今のあなたの気持ちに一番近いものを選んだください。	
とても満足、少し満足と回答した生徒の主な記述	・訪問などで、現場の意見などが聞けたから。 ・自分の興味のある分野についての学びを深めることができたから ・周りのみんなとテーマは違うけれどお互いにこうした方がいいんじゃない？などと話し合って進めれたから ・通常の高校生活では出来ないだろう実験を大学生や大学の先生方の協力のもと行うことが出来たから。 ・自分の将来に役立つことを探究できたから。
わからないと回答した生徒の主な記述	・あまり関わっていなかったから ・探究自体は楽しかったけれど、みんなの前で発表するのは好きではないから ・基本個人で調べていたから ・なんとなくもっとできるような気がしたから
とても不満、少し不満と回答した生徒の主な記述	・探究テーマによってはあまり人と関わることが出来なかったから。 ・探究の時間が本当に必要なのか疑問に思った。 ・最終的な結果にたどり着けなかったから。 ・高校にやるべきことでは無いと考える大学からでも遅くは無いだろうか ・なぜやっているのか分からないから ・納得のいく活動ができなかったから。
②大学生や大学院生がアドバイザーとなって附高ゼミに参加したことについて、今のあなたの気持ちに一番近いものを選んでください。	
とても満足、少し満足と回答した生徒の主な記述	・多くの視点からの意見を得ることができ、より良い探究に繋がったと思うから ・大学生と関わる経験にもなったし、歳が近くて、わからないことなど気軽に聞くことができたから。 ・先生方よりも身近に感じる存在なため、色々なことを相談できた。 自分と同じくらいの人でも違う考え方を教えてもらえたから。 ・自分だけの知識じゃ補えなかった部分を大学生の方や大学院生の方にお話を伺うことで探究活動をより良くすることができたから。 ・歳の近い人なのに自分よりもはるかに知識があって驚いた。
わからないと回答した生徒の主な記述	・大学生の人とか大学院生の人とあまり話すことがなかった ・関わってない
少し不満と回答した生徒の主な記述	・あんまり大学生や大学院生の印象がなかった ・ほかのことに時間を作れると思ったから
③大学教員がアドバイザーとなって附高ゼミに参加したことについて、今のあなたの気持ちに一番近いものを選んだください。	
とても満足、少し満足と回答した生徒の主な記述	・専門的な知識が富んでいて楽しかったから ・大学レベルの知識もわかりやすく教えてくれたり、大学の実験室や道具を使い質の高い探究ができたから。 ・厳しいことを言われたこともあったが為になったと思う。 ・行き詰まっていた時に少し違った視点からの意見を教えてくださったから。 ・専門性の高い先生方の意見を取り入れて調査することで、自分だけで調査するよりレベルの高い調査を行うことができたから ・本を使おうとしてなかったけど、本とか探してみたら？と言われて探すと、テーマにあった本が見つかり、新たな根拠が増えたから。 ・先生方の広い知見に、とても助けられました。着地点が見つからない時、ヒントを貰ってなんとか完成に漕ぎ着けました。 ・的確なアドバイスや情報源を教えてもらえた

わからないと回答した生徒の主な記述	・あまり関わりがあったと思わない ・話す機会がなかったから。
とても不満、少し不満と回答した生徒の主な記述	・私が意図していたことを組み違えて解釈されて見当違いなことをアドバイスされたから。 ・「どういう探究をしているの？」と聞かれて違う人に何度も説明をしている時間に探究ができたと思うから

各項目で「とても満足」、「少し満足」と回答した理由の記述を見ると、大学教員からは専門的な知識を教えてもらえたことはもちろん、大学教員からの探究活動を進める上での調査方法に関するアドバイスや、新たな視点を獲得できた生徒が多くいた。また、大学生や大学院生に対しては、年齢が近いことによるコミュニケーションの取りやすさを記述している生徒が複数いて、大学教員だけでなく、大学生や大学院生に協力してもらった意義が感じられる。さらに、「歳の近い人なのに自分よりもはるかに知識があって驚いた。」という記述から、大学生や大学院生のような年齢の近い人たちの姿の方は、探究して学んでいくことの必要性や素晴らしさを実感させられる可能性が高いと感じた。

一方で、「わからない」や「少し不満」、「とても不満」とした生徒たちに共通するのは、関わりが少なかったことである。ゼミによっては大学教員が参加できる回数が少なく、ゼミ間で大学教員などの参加に大きな差があり、大学教員や大学生、大学院生と関わる時間や回数をある程度揃えていく必要性を感じた。

4. まとめ（成果、課題、今後の展望）

(1) 附高ゼミの現状の成果

新しい高大連携の構築と、高校と大学の連携の広がりが生まれたのは附属高校としての価値を高めるとても意義ある取り組みになったといえる。また、多くの生徒が附高ゼミにおける探究活動に対してある程度の満足感を持つ結果となった。

(2) 49 回生の附高ゼミからみえる課題

事後アンケートでの「探究の時間が本当に必要なのか疑問に思った。」、「高校にやるべきことでは無いと考える大学からでも遅くは無いだろうか」、「なぜやっているのか分からないから」といった生徒の声から、探究活動の意義や目的が浸透していない様子がわかる。このような声が上がった原因としては、探究活動の意義や目的の共有が足りなかったことと、キャリア形成とのつながりを持った探究活動にできていなかったことが考えられる。総合的な探究の時間のあり方や計画を見直し、生徒が「自己の在り方生き方」と一体化した探究活動ができる附高ゼミにする必要がある。

(3) 今後の展望

高大連携のさらなる強化を目指して、附高ゼミを中心に大学との協力体制の構築を今後も継続して行っていく。さらに、今回の２年間の附高ゼミを通して一番の課題となった、探究活動の意図や目的を感じられない消極的な生徒を減らしていくために、生徒のキャリア形成の一部に位置づけた附高ゼミの実施を目指して、進路学習や自己の在り方生き方を考える自己探究学習を充実させ、生徒が自分のキャリア形成の一環として附高ゼミにおける探究学習に取り組んでいけるような学習計画をつくっていく。そして、課題を一つ一つ解決し、一人でも多くの生徒の「心のエンジンを駆動」させられる３年間の総合的な探究の時間としていきたい。